

管理運営を含む諸活動に関して、法人内諸学校の責任者による学校長会において意見を交換し、初等・中等教育レベルからの要望や意見を吸い上げ学内活動に反映させるシステムが確立している。またキリスト教教会関係者や同窓会、後援会、学生採用企業などと定期的に意見交換を行う場を設けているが、大学の社会的責任がますます重要となっている昨今、本学独自に、恒常的に外部者による大学活動の評価を行える体制・仕組み作りを行っていく必要がある。なお、本学はキリスト教大学であるため、外部評価者がキリスト者であることが基本的な要件となると考えられるが、特に専門的な立場から評価に関わる場合には、キリスト者以外からの登用も必要となるであろう。さらに、常に外部の目に曝されるという緊張感のある大学運営をしていくためには、個人情報に配慮しつつも学内の諸情報の公開性、透明性を一層高め、外部者が本学の様々な情報にホームページなどから容易にアクセスできるシステムの構築を進めることが重要であると考えられる。

4 大学に対する社会的評価

1) 聖学院大学の社会的評価と教育上の特色

(C群: 大学・学部の社会的評価の検証状況)

(C群: 他大学にはない特色や「活力」の検証状況)

【現状の説明】 「面倒見のよさ」というものが、大学の教育の質を評価する指標として加えられるようになって久しいが、本学は2000年から連続6年間「面倒見のよい大学」ランキングのベスト20位以内にランクインしており、「面倒見のよい大学」としての社会的評価が定着している（週刊『東洋経済』および週刊『サンデー毎日』の調査による）。

また本学では、早くから社会人を対象とした「公開講座」や「社会人入試」を行ってきたが、「積極的に社会人を受け入れている大学」として社会的な評価を得ている（『2007年度版大学ランキング』（朝日新聞社刊） 全国91位）。

文科系の大学としては、早くからコンピュータ・リテラシー教育に力を入れ、「コンピュータ基礎」を必修化するなど「情報教育」に積極的に取り組んできた点が評価されており、在宅でインターネットを通じて履修していくコンピュータ教育は「聖学院方式」と呼ばれるようになっている（本学のコンピュータ教育への社会的評価については『日経PC21（2001年度版）』日経BP社刊、『模索されるeラーニング——事例と調査データにみる大学の未来』東信堂2005他参照）。

また大学ホームページを通じて入試結果やシラバス、就職実績などについて積極的に情報公開を行っているが、『2007年度版大学ランキング』（朝日新聞社刊）において、全国の大学のWebサイトに掲載された入試、教育に関する項目を調査した「Webサイト・ランキング」において全国39位にランクされるなど評価が高い。

第 14 章 自己点検・評価

さらに、高大連携の一環として 2001 年度から高校への「出張講義」を実施しているが、2005 年度は本学教員の派遣回数が 79 回に達しており、確実に定着し、評価されている。

以上のように、「面倒見のよさ」「社会人入試の重視」「早くからのコンピュータ・リテラシー教育の取り組み」「WEB を通しての情報公開」「高大連携への積極的な取り組み」といった本学ならではの特色が、それぞれに社会的な評価を受けている点は明らかである。

【点検・評価】 【課題・方策】

本学は、4 年制大学としての建学以来、20 年に満たず、現在の 6 学科体制となった 2000 年からはようやく 6 年、そして 3 学部 6 学科という現在の体制を整えた 2004 年度からは 2 年しか経ていない。その意味で、必ずしも大学としての歴史が長くはなく規模も大きくはない大学としては、短期間の間に、多様な観点から社会的に評価され注目されるに至っている点は、絶えざる自己改革を試みながら敏感に社会のニーズを把握し、意欲的にそれらに取り組んできたことの結果として、高く評価できるものである。ことに教育現場における不登校やいじめ、教室崩壊、そして学力低下といった点が社会問題化している今日、「面倒見のよい大学、入って伸びる大学」という本学への社会的評価は、まさに時代の切迫した課題に適切に対応していることの証左でもある。いわゆる偏差値基準のみによらず、それぞれの個性に応じて育てていくキリスト教精神に裏打ちされた本学ならではの人格教育に対する評価が定着しつつあるといえるだろう。

しかし一方、いわゆる大学全入時代が到来しつつある中、「面倒見のよさ」という評価の指標のみによって本学に適した学生を受け入れ育てていくことには限界も出てきている。本学は、従来の教育環境の中で必ずしも正当に評価されえなかった学生を受け入れ、それぞれの個性に合わせて伸ばしていく「面倒見のよさ」を維持しつつも、同時に、本学のような規模だからこそ可能となる「少人数教育」という特長を活かし、学際的な特色ある科目の新設等を通して、時代のニーズに敏感に対応し自ら問題提起していくことのできる人材の育成に意欲的に取り組んでいる。こうした後者の側面についても社会に対して効果的に発信していくことにより、「面倒見のよさ」に加えて新たな評価の指標を打ち立てていくこと、こうした課題が急務である。

5 大学に対する指摘事項および勧告などに対する対応

1) 文部科学省などからの指摘などへの対応

(A群:文部科学省からの指摘事項および大学基準協会からの勧告などに対する対応)

【現状の説明】 2000 年度に本学が財団法人大学基準協会に加盟する際、同協会から受けた改善項目は下記のとおりである。これについては、『改善報告書』を作成し、2004 年 7 月に大学基準